

# 「朝の会」における学習指導法

—奈良女子大学附属小2年月組の「朝の会」の1年間を手がかりとして—

溜池 善裕

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第7号 別刷

2020年8月31日



## 「朝の会」における学習指導法<sup>†</sup>

—奈良女子大学附属小2年月組の「朝の会」の1年間を手がかりとして—

溜池 善裕\*

宇都宮大学共同教育学部\*

2018年度を画期として、奈良女子大学附属小で見直されている「朝の会」における学習指導法について、2019年4月から同附小2年月組で実施された「朝の会」の1年間の分析を通して明らかにした。

キーワード：奈良女子大学附属小、朝の会、学習指導、カリキュラム・マネジメント

### 1. 目的

小学校で行われている「朝の会」に関する先行研究は、集団づくりや発話の様態、特別活動としての位置づけ (1) のように、学習とは直接関係のない側面から検討されてきた。また、奈良女子大学附属小 (以下、奈良女附小と略記) では「朝の会」が「なかよし」に位置づけられ戦後一貫して実施されてきたこともあって、1960年頃からつい最近までの奈良女附小における「朝の会」に関する実践研究 (2) は、学級経営等の視点によるものがそのほとんどである。

けれども近年、奈良女附小では、「朝の会」を学習との関係において位置づけた実践研究が行われ、2019年から附小教員・杉澤学氏・薄田太一氏が論文として発表 (3) するに至っている。その背景には、第一に、杉澤氏が担任学級において朝の会を学習指導の場として明確に位置づけて方法論を確立したこと、第二に、2人が2015年4月から1年生担任として学年を組んで2年まで持ち上がり、3年時の学級編成

替え時に学習指導の結果の違いを確認し、薄田氏もまた同様の方法論を磨き始めたためである。また、杉澤氏は2018年度にその3年生を4年まで持ち上がり「しごと」学習における子ども達の成長の具体像を明らかにしている (4)。奈良女附小としては「朝の会」と学習指導との関係についての実践研究は始まったばかりだが、その意義は大きいと言えよう。

筆者は、2人の実践を2015年4月から追ひ、授業等を継続的に分析 (5) してきた。本研究はその研究をもとに、附小・2年月組の2019年度に直接参観し記録した「朝の会」と、担任・薄田先生が記録した「朝の会」の板書データを手がかりに、「朝の会」における学習指導の具体的方法とその意義を明らかにする。

### 2. 学級編成替え直後における「朝の会」

2018年度、1年月組の子ども達は、助け合い協力して学習を作ることができるまでになった。そして2月の学習研究発表会では、どのようなテーマにすれば良い学習を作ることができるかについても、考えることができるまでに成長した。そのような子ども達におとずれた事態は、3月最後に発表されたクラス替えであった。

4月初日、4月8日の「朝の会」で実施されているのは、「おぼえているかな? ゲーム」である。このゲームは、自分の席・ロッカー・出席番号を思い出して動き、机やロッカーの片付けをしながら2年生のスタート準備をするというものである (4月8日板書)。ここでは子ども達のそれぞれの動きが確認され、それを手がかりにどう指導するかが考えられている。

<sup>†</sup> Yoshihiro TAMEIKE\*: The Method of Study Guidance in the "Asa-no-kai" (Morning Meeting) of Elementary School—Through the One-year Analysis on the "Asa-no-kai"(Morning Meeting) of "2-nen-Tuki-gumi" (second grade class) of the Nara Woman's University Attached Elementary School—

Keywords: Nara Womens's University Attached Elementary School, morning meeting, learning guidance, curriculum management

\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先: tameike@cc.utsunomiya-ac.jp)

また、4月16日では、「さくらのはな」に関するお知らせを使って学習を作り、さくらについての独自学習が起こるよう働きかけている（4月16日板書）。

翌4月17日の「朝の会」は参観し記録したので、その記録をもとに詳細を見てみよう。

#### (1) お友達に聞こえる声でお伝えする

「朝の会」の最初に、なかよし委員さんのお伝えがあり、それについてのおたずねが続いた。なかよし委員とは、児童会の委員である。なかよし委員は、朝の委員会で今日のお伝えを聞いてノートにメモし、みんなに伝えるのが、「朝の会」での重要な役割である。

おたずねを通してなかよし委員さんが指摘されたのは、言い間違い（H女さん）と、声が小さく聞き取れない（O女さん）ことであった。しかし、言い間違いを指摘されても、自らのメモを訂正しなかったため、その後も同様の誤りをおかし再び指摘される事態となった。

言い間違いの原因はメモのミスであり、再度の言い間違いはメモを訂正しなかったことに起因する。また、声が小さいことについては、なかよし委員さんがお伝えすることがらが、クラスのお友達にとって重要であることについての認識不足からくるものである。そしてこれらはいずれも、なかよし委員さんがお友達のためにどのように動けば良いかという、自らの役割が分からないために起こっている。

#### (2) 適切に受け応えをする

次に指導されたのは、多くのお友達に意味のあるお伝えをするというなかよし委員さんの役割を考えながら動くということである。

なかよし委員さんに対し、S女さんは、1年生が耳当てをして通学しており、まわりの音が聞こえず危ないので耳当てをしないようにお伝えしてほしいというお願いをした。S女さんなりに気づいたことではあるが、季節はずれのためほとんどの子どもがそれに該当しないという意味では、その季節になってお伝えの方が意味のあることである。けれども、なかよし委員は「わかりました」と即答したのである。そこで薄田先生は、その場をとらえて指導した。

#### (3) 分からないときはおたずねする

また、GH男君がおたずねした「こうげんのジャンパーって何ですか」は、すでにO女さんによって指摘された、なかよし委員さんの声の小ささと同根のものである。GH男君の席は、教室の一番後ろに

位置しており、前から三番目に座っているO女さんが聞き取れなかったのであるから、GH男君はO女さん以上になかよし委員さんのお話が聞き取れなかったはずである。

けれどもGH男君は、お友達への遠慮もあり、聞き取った「こうげんのジャンパー」のはずでもないため、一度きりの控えめなおたずねで済ませようとしたのである。薄田先生はそのようなおたずねの在り方をとらえ指導したのである。

一番後ろの席のGH男君が聞き取れなかったのであるから、そのまわりのお友達も聞き取れていないのである。その意味では、聞こえなかったお友達のためにも、おたずねは遠慮すべきことではない。薄田先生はそれを問題としているのである。

#### (4) 理由や目的を言ってからお伝えする

次は、4年生からのお伝えを取り上げ、お伝えを適切に言い直させることを通して、お伝えはどのようにすればいいかについて教える指導であった。なんの前置きもなく「名札を付けようプロジェクトをしています」と話し始めた4年生の発言を止めて、言い直しをさせたのである。「名札をつけようプロジェクト」とは具体的に何であるのか、なぜそれを始めたのかを説明しなければ、お話は相手に伝わらない。そのことを4年生のお伝えの場面をとらえて指導することを通して、2年生の子ども達にそれを教えたのである。

#### (5) 理由を説明する

4年生のプロジェクトを受け、学校に名札を持ってきていない子どもに、その理由を説明させる指導が次に行われた。この指導では薄田先生が、名札を学校に忘れた数名の子を咎めるよりもむしろ、名札を持ってきていない理由を説明する指導に切り替えて実施した。今、名札はないのであるから、明日以降、名札を持ってくればそれで済むからである。

最初のE女さんは、その理由を説明できているが、次のA男君は理由を最後まで説明できない。そこで、十分に時間をとって、最後まで説明をさせた。次のC女さんはA男君と一緒にしたため、その内容をあらためて問い、時間をとって丁寧に説明させた。

#### (6) メモを取りながらお話を聞く

このあと、お話をしに来てくれた4年生に、2年月組全員が「あがとう」を言えていない点を指摘したあと、お友達の話の聞き方の指導に移っている。

ここで用いられているのが、声が小さく聞き取り

づらかったなかよし委員さんがお伝えしたことのうち、最初にお伝えした一言を確認するという、子ども達には思いも寄らない方法であった。最終的な指導は、なかよし委員さんが最初に伝えたことをどう聞くかであるが、その手前で行われているのが、「ノートなんか全く出さへんやん。今、ノート出してない人、おもにあてたんです」という教師の発言から分かるように、メモを取りながらお友達の話聞く指導である。

### (7) 自分たちの今日の動きを考え生活を見通す

さて、なかよし委員さんが最初にお伝えしたのは「今日は身体測定が3・4年生であります」という一言であった。なかよし委員さんは声が小さく、また早口でもあったので、最初のお伝えはきわめて聞き取りづらく気づきにくい。けれども、なかよし委員さんのお伝えの中で、子ども達の今日の生活と最も関係のある部分であった。

薄田先生による問いかけは「身体測定があります。みんなには関係ありません（C はい）か？こう言われてみんなは、今日、何を気をつけなければいけませんか？」であった。

この問いかけについて、廊下で静かにしないといけない、廊下は右側通行で歩く、静かに廊下を通らないといけない、廊下にいて列が多くなるのでどけてあげる、階段ですれ違うときにちょっと危ないかもしれないという考えが次々と出された。けれども、今日の2年月組と3・4年生の動線が具体的に考えられていないため、どれもが2年月組の子ども達の生活とは関係しないものばかりであった。

そこで、薄田先生は「すれ違いますか？」と問い直して2年月組の教室と身体測定が行われる保健室の位置関係をあらためて確認し、U男君の「3時間目に、身体測定だったら、20分休みに、こけたりすると、身体測定の時間にじゃま、じゃまになってしまうので、こけないように気をつける」を引き出している。そのあと、MN女さんの「先生が働いて、3年生、4年生を計ったり、体重を計ったりしているので、頭が痛くなったとか、お腹、痛くなったというときに、R先生はそれを、会話できない」という詳細な説明を引き出し、自分たちの今日の動きを考えることで、どのように見通しをもって生活をすればいいかについて、多くの子ども達が気づくよう働きかけているのである。

### (8) 詳細なメモをもとに考える

このあと薄田先生に「ほかにどんなことがあった？」と問われ、指名されたF女さんが「私が書いている中では、バットを綺麗になおすということと、学園前駅に不審者がいたので、気をつけるということと、K君の紺色のジャンパーがなくなったということです」という自分のメモをすらすらと読み上げている。こうして、声の小さいなかよし委員さんの話を聞き漏らさずにとった詳細なメモが提示され、聞きながらメモを取ることの重要性が印象付けられている。

ここに加えられたのが、薄田先生による「こういうことが起きるよってこと、予想しなきゃだめです。だったら、みんなはどうすればいいんですかっていうこと」という最後の問いかけである。お友達のお話を聞くことはもちろんであるが、それを漏らさずメモすることで、今日は「こういうことが起きる」から、こんなふうに生活をしようと思うことのできるその重要性がここで強調されているのである。

## 3. 1カ月後の「朝の会」での学習指導

### (1) 「朝の会」で学習を作る

4月から6月初旬の研究会初日までの「朝の会」の板書記録では、4月24日「はたけになにをうえるか」（4月24日板書）、4月26日「うんどうかいのとびばこをどうとぶか」（4月26日板書）、5月27日「ぞうけいで作りたいもの」（5月27日板書）、5月29日「あさのあいさつうんどう」（5月29日板書）、6月7日「すみやすいとはどういうことか」（6月7日板書）というように、その時々に出された話題をテーマとして学習を実施している。子ども達はそれぞれに独自学習をして筋のある学習を作っており、それを発表してお友達から意見を聞いてみたい子どもがいる。そのお知らせを「朝の会」で取り上げて学習（相互学習）を作り、学習の作り方についての指導すなわち学習指導を行なっているのである。

### (2) 日直としての役割を考えながら動く指導

この延長線上にある5月22日の「朝の会」は事情により4時間目に実施された。この日はN男君とM男君が日直をつとめ、「朝の会」の時間にできなかったCD男君の発表を行った。最初に行われたのは、日直の動きに関する二つの指導である。その第一は、日直の2人が全体の動きを見ながら号令をかけなければお友達が何を指示されているか分からないこと

を教える指導、第二は、日直は特別教室での学習が終わったら黒板を拭き、お友達よりも早く自分の道具を持って教室に戻り次の学習の準備をするという指導である。この二つの指導は、「まわりのお世話をするということが抜けているんじゃない」という薄田先生の指摘から分かるように、日直としての役割を考えながら動くための指導である。

### (3) 論理的な話し方についての指導

さてCD男君の発表は、自分が空を飛ぶために鳥の羽のしくみを調べたことについての発表であった。CD男君は、図鑑を見ると、鳥は体重によって羽の長さが違うことが分かったので、自分の体重の半分であるヒメコンドルの羽の長さ80センチを2倍すれば、ちょうど良い羽の長さの130センチになるという発表を行った。これについて、S女さんが自分の体重でも飛べるのかというおたずねをし、「体重によって羽の長さが変わるので、体重はどれくらいがいいかは関係ないと思います」と説明したところで、薄田先生が出て、時間を十分にとった指導を行った。

その際のS女さんの発言は長く、実際のおたずねは発言の終わりの部分であった。この時の子ども達の「やっと分かった」「長すぎて分からなかった」というつぶやきを捉え、薄田先生は出たのである。薄田先生は、S女さんの発言は長いけれども、とても大事なことを言っていた点について説明をしたが、その際、CD男君の発表が複数の部分から成ることを「①はねの長さ～体じゅうによってちがう、②自分の体じゅうをはかる→22キロ、③コンドル(ヒメコンドル)にちゅうもく」と板書し、S女さんの発言についても「長すぎてなにを言ってるのかわからない」と板書している。このあと、子ども達とのやり取りの中で、80センチの2倍だから130ではなく160であるという発言を引き出し、「④『CD男コンドル』160センチひつよう」と板書した。

ここまでの指導は、CD男君の発表が、論理的整合性のある四つの命題から成り立っていることを板書で明示するものである。また同時に、S女さんの発言は長いけれども、CD男君の学習がこのようなすぐれた論理的整合性のある良い面を持つことを引き出したことを際立たせ、お友達を大切に学習を教えるものである。

### (4) 発言の仕方についての指導

ここから、「長すぎてなにを言ってるのかわから

ない」のをどうすれば良かったかについての話し合いに移った。このことは言いたいということを取り出してみんなに伝える、思ったことと事実がたくさんになる、自分が何を言いたいのかわからなくなる、が出され、S女さんによる「このことは絶対に言っておきたいということだけ言う」という考えが出されたあと、言うことを考えてから口に出してみんなに伝える、意見を言う前に考える、本当に伝えたいことをまとめてから話すという発言を引き出し、加えて、言いたいことがわからなくなるからそんなに無理はしなくてもよい、という意見が出たところで学習指導を終えている。

### (5) 学習を作るための学習指導

以上から分かるのは、「朝の会」を作ることの出来なかった4月17日から1か月後の5月22日にはほぼそれができるようになっていることである。なぜなら、そこで指導されたのは、以下の日直指導①のをぞき、発言の仕方に関する②③④だったからである。

- ①日直はどのような役割を果たさなければならないかを考えて動く。(上記(2))
- ②友達の作った学習の良いところを引き出す発言をする。(上記(3))
- ③発言は、自分の考えと、その裏付けとなる事実をつなげて、端的に言う。(上記(4))
- ④長く発言すると、自分の考えが伝わらなくなってしまふ。(上記(4))

②③④は学習と直接関係があることがらである。したがって、「朝の会」の作り方の指導が、みんなで作る学習を作る指導に置き換えられていることを示唆する。このことは、すでに(1)で見たように、4月から5月の「朝の会」が、その時々独自学習の話題で学習を作る「朝の会」になっていることから裏付けられる。

### (6) お友達を大切に学習を作る

また②③④については、特定の個人、S女さんを問題にして学習指導をしている。それはなぜかと言えば、学習は子ども達相互の関係において行われており、その関係の重要性が注視されない限り、みんなで作る学習とはならないからである。ここで出たのはL女さんの「みんなはS女さんの言っていることは、言っていることは長すぎて何を言ってるかわからないと言っていました。S女さんも、自分の長すぎたことを反省しているのは分かったけど、S女さんは、そんなに無理をしなくてもいいと思います。

なぜかという、無理をしすぎると自分がその方が自分が言いたいことが全然まともなくなるからです」という発言であった。

4月から5月にかけて「朝の会」で学習を作り、学習の作り方について指導を行っているのであるが、学習を作るにはお話をつなげるだけでなく、お友達を大切にすることがその底流になければならない。学習の作り方を指導する中で、最も重要なことが残りが残り、学習の中でこのことに気づいた子どもの発言を位置づけ、この日はそれを学習指導していると考えられる。

#### 4. 学習研究集会における「朝の会」

##### (1) 学習してきたことがらと事実の関係を確かめる

学習研究集会初日の6月7日の「朝の会」では、学園前駅の信号機について聞き取ったことを持ち寄って学習を作り（6月7日板書）、翌、6月8日も同様の「朝の会」となった。

子ども達が調べて来たこととは、最寄りの近鉄学園前駅の信号機に関して、150メートル離れなければあらたに信号機を設置できないということであった。けれども、実際の信号機を見てみると、交差点に立っている四つは150メートルも離れておらず、近接しているのである。「朝の会」においては、子ども達の意見のやりとりによって、交差点にある4つの信号機を面としてとらえ、その面と150メートル離れたところにあらたな信号機を設置することができないことなのだという考えが出された。

この「朝の会」では、持ち寄った学習の問題点－調べたことがどのような事実に対応しているか－を明らかにすることを指導したものである。調べてきた（独自学習）ことがらを持ち寄って学習を作る中で、その問題点を発見し、この日の学習（相互学習）をどう作るかという見通しを持つための学習指導をしているのである。

##### (2) 「朝の会」と「しごと」学習との関係

4月から5月にかけて実施してきたのは、「朝の会」で学習を作るということであった。その結果、6月においては、学習が作れる状況の中で、(1)のようにその日に持ち寄った独自学習において乗り越えるべき問題を明確にする方法を教えている。この指導は、「朝の会」で学習に関係することを出し合えば、今日やろうとしている学習の問題点があぶり出せることを教えるものでもある。これは、問題点をあぶ

り出すという意味では独自学習の方法の問題点を考える指導であると同時に、「朝の会」を自分達でどのように作るかによって、その日の学習の見通しをつけられることを教える指導でもある。

つまり、6月になると、「朝の会」は学習の作り方を指導する場のみならず、そこで作った学習をもとに自分達の今日の学習の見通しを作る場としても位置づけられ、学習の作り方やそのような「朝の会」の位置づけ方を体得することに向けて学習指導されていると言えよう。

#### 5. 前期最後の学習に向けて

##### (1) お友達にどう伝えるか

学習研究集会の約20日後、6月26日の「朝の会」で行われていたのは、主として二つの指導であった。その一つは、お友達のお話をどう聞か、お友達にどうおたずねするかという、学習においてお友達をどのように大切にするかという指導であった。

お友達の発表を聞いて、よく分からない点については、おたずねをする必要があるが、この指導の目的は二つある。それは、一つには、お友達が自分の独自学習で気づくことのできなかった点についておたずねをしてくれることで、自分やそのお友達の学習がより深まることであり、もう一つには、そのようなおたずねがなされることによって、ほかのお友達にも分かることがあり、お友達みんなの独自学習がより一層深まるためである。

この際、注意しなければならないことは、お友達に伝えようとするあまり、推測にもとづく不確かなことをお伝えしてはならないということである。お友達の学習がより確かなものになったり、深まったりするためには、根拠となる精確な事実が必要である。したがって、おたずねされたことが不明確な場合には、もう一度確かめてからお伝えをすることが重要なのである。薄田先生はまずこの点についての指導を行った。

##### (2) 状況を具体的な事実をもとに伝える

二つ目の指導は、具体的な事実をもとに状況を伝えることである。音楽の時間が「ごちゃごちゃ」しておりそれを反省しようと直日が発言したが、状況が抽象的な言葉で伝えられ、具体的に何がどうなっているのかが不明瞭であった。「ごちゃごちゃ」では分からないという子どもの発言を薄田先生が位置づけ、「ごちゃごちゃ」とはどういうことなのかに

ついて話し合う時間がとられ、音楽の時間の何が問題なのか子ども達から出された。

この指導は、学習のテーマを決める際には、状況を具体的な事実をもとに伝えることで、具体的に何について考えるのかをはっきりさせなければ学習が作れないことを教える学習指導である。

### (3) 日記という手がかりのない「朝の会」

後期最後の7月20日に行われたのは、一週間の間、担任が子ども達の日記を読まず、学習指導の手がかりや、その学習展開の構想が得られないままの「朝の会」であった。なぜこのような状況になったかと言えば、担任が高学年の臨海合宿で引率をする中、臨海合宿から戻った翌日に公開学習をむかえたためである。

したがって、薄田先生が是が非でも行わなければならなかったのは、「朝の会」を通して子ども達の独自学習の様子を知り、それを公開予定の「しごと」の学習指導に生かすということである。この日の「朝の会」で問題になったのは、カーブミラーはどこなところについているのかであった。この「朝の会」を通して感じられたのは、子ども達の学習が、十分に具体的ではない様相であった。

そのため、薄田先生は次の「しごと」の学習では、カーブミラーについて具体的事実を集めて学習してきたと思われる子どもを指名し、そこから学習を展開しようとしたのであった。しかしながら、後日、日記を確かめて分かったのは、きわめて具体的に詳細な独自学習をした子ども達が予想以上に多数いたことであった。

ここから分かるのは、子ども達の学習が日々進んでいるために、1週間ほど学習の全体像をとらえていないと、「朝の会」だけでその状況をつかみ得ないという点である。これは、子ども達が、1週間の間に、それぞれの学習に筋がついていることの示唆でもある。4月から3か月を経過する中で、学習指導により学習の仕方を身につけつつある子ども達は、1週間の間にみるみる学習を作り、そこに筋をつけることができるまでに育っていたのである。

## 6. 後期（9月以降の「朝の会」における学習指導）

### (1) お友達の位置づけをはかる

#### 【表1】「朝の会」における学習指導一覧

4月17日

- ・お友達に聞こえる声でお伝えする。(a)

- ・適切な受け応えをする。(b)
- ・分からないときはおたずねする。(c)
- ・理由や目的を言ってからお伝える。(d)
- ・理由を説明する。(e)
- ・メモを取りながらお話を聞く。(f)
- ・自分たちの今日の動きを考え生活を見通す。(g)
- ・詳細なメモをもとに考える。(h)

5月22日

- ・日直としての役割を考えながら動く。(i)
- ・論理的な話し方についての指導。(j)
- ・分かりやすい発言の仕方についての学習指導。(k)

6月8日

- ・学習して来たことがらと事実の関係を確かめる。(l)
- ・今日の学習の問題点を明らかにする。(m)

6月26日

- ・お友達に責任をもって伝える。(m)
- ・状況を具体的な事実をもとに伝える。(n)

7月20日 ※学習指導なし

9月26日

- ・友達のなげかけに応じて自分の考えを言う(①)。

10月31日

- ・今日の動きを考えてお友達にお伝えをする(②)。
- ・お友達へのお知らせについておたずねされて分からない場合は、確かめてからあらためて伝える(③)。
- ・自分達の学習の事実を根拠にして、今日の学習の取り組み方を考える(④)。

12月4日

- ・お友達の発言につなげる場合は、お友達の考えの構造に注意する(⑤)。
- ・歌の歌詞の意味を考えながら歌う(⑥)。

1月22日

- ・お友達にお伝えをするときの姿勢や態度(⑦)。

2月7日

- ・お友達がいつ大事なことを言うか分からないからノートにメモを取る(⑧)。
- ・気付いた問題は見直しをもって解決する(⑨)。
- ・クラスの係の仕事にはみんなが関心を持つ(⑩)。
- ・お友達のお知らせを生かして学習につなげる(⑪)。

2月8日

- ・どうすればいいか分からないことについては、専門家から話を聞いてから判断する(⑫)。

子ども達による学習の作り方に関する主な学習指導はほぼ前期で終了していると考えられる。それは



なぜかと言えば、7月20日に担任が子ども達の学習を十分にとらえないまま「しごと」学習を行ったが、45分間の話し合いによる学習が成立していたからであり、またそれを裏付けるように、前期の「朝の会」における指導内容はaからnまでのすべてが、子ども達それぞれが自分の役割を考えながら「朝の会」をどう作るかという、学習の作り方につながる指導となっているからである。

そのように考えると、【表1】の9月以降の指導内容が、お友達のお話をどう聞くかや、お友達にどうおたずねするかのような、学習においてお友達をどのように大切にすることがあることは何を意味するのであろうか。

9月26日の「朝の会」では、①のように、自分の発言は友達のなげかけに応じて行わなければならないことが指導されている。この指導は、初期段階ではお友達の話に「つなげる」という単純なものである。この指導によって、子ども達は、同じような話題や同じことがらについての考えをつなげて言えることができるようになっていく。

だが、子ども達にとってむずかしいのは、「応じて」という部分である。なぜなら、自分が言いたいことや、主張したい考えがあっても、今お友達がなげかけたことにどう応えるかが求められるからである。それは例えば、あらかじめ準備していた、自分の独自学習をもとにした考えがあっても、いったんそれを棚上げしたりなんとか生かしたりして、お友達を大切にしながらより良い学習を作ることが求められているのである。

お友達についてのこのような学習指導は、10月31日(②③)においても、また12月4日(⑤)、1月22日(⑦)、2月7日(⑧⑩)においても同様である。そして、お友達の考えの構造(12月)、お友達にお伝えする時の姿勢や態度(1月)、お友達のお知らせを生かして学習につなげる(2月)のように、12月からは高度かつ詳細になっているのが了解される。

一方、薄田先生による板書の記録では、1) なかよし委員さんのお伝えの仕方(9月3日板書)、2) なぜセブ島にはカーブミラーや信号機がないのか(9月26日板書)、3) よそう→事実→なぜか?(11月7日板書)、4) 係の仕事・2年月組のために自分は何ができるのか(11月8日板書)、5) 事実を確認する(11月21日板書)、6) 上手に説明するためにはどうするか(12月5日板書)となっている。このうち4)

6) はお友達を大切にすること、1) 2) 3) 5) は学習の作り方に関するものである。

「朝の会」の授業記録と薄田先生の板書記録を合わせて了解されるのは、後期はお友達を大切にするという高度かつ詳細な学習指導をしつつ、その都度、学習を作る中で出来ていない細かなことがらを見つけて「朝の会」で指導しているという事実である。

## (2) その日の学習につなげる

前期での学習指導を子ども達が体得し、それを実際に「朝の会」で展開しているのは、後期における「朝の会」の特徴である。例えば、10月31日は、自分達の学習の事実を根拠にして、今日の学習の取り組み方を考える(④)動きがとらえられ指導されているが、この学習指導によって、「朝の会」のお伝えとおたずねを通して、それぞれの独自学習の問題点が明らかになり、それをもとに次時の学習を作っていくということを可能にしている。前期の6月26日の「朝の会」で指導されていたnは持ち寄った独自学習の持つ問題の見出し方であるが、それを子ども達が会得して実行している中での荒削りの部分をとらえてさらに詳しい学習の作り方を指導しているのである。

この学習指導に関して、2月8日の「朝の会」では、専門家の話を聞いてから考える必要があることが学習指導され(⑫)、あらかじめ問題点が明らかになった場合の措置の仕方が具体的に教えられている。このように子ども達を作る学習の荒削りの部分がつねにとらえられることで、子ども達は動き続け学習し続ける存在となるのである。

## 7. 結論：「朝の会」と学習との関係

### (1) 「朝の会」における学習指導の様相

以上見て来たように、「朝の会」で学習指導されたことを時系列で見えていった時、およそ次のようなことが言えよう。

- 1) 学習を作るための基礎的な方法についての詳細な学習指導は、4月の当初から行われる。
- 2) その結果、1か月程度で、子ども達は助け合い・協力して学習を作ることができるようになる。
- 3) この学習指導は、子ども達それぞれが作っている学習(独自学習)を「朝の会」に持ち寄り、そこで学習(相互学習)を作ることを通して行われる。
- 4) その際、子ども達それぞれが作っている学習を

日記でとらえておき、どのような学習指導を展開していくかを考えつつ「朝の会」を実施することが必要である。

- 5) 子ども達で学習を作れるようになってからも必要となるのは、学習でお友だをどのように大切にするかという学習指導である。
- 6) またこの指導と合わせて、学習の作り方に関する細かな指導や、持ち寄った学習に見出される問題を解決するような学習の作り方に関する指導が行われる。
- 7) 子ども達は、お友達の学習をみんなの学習に生かし、助け合い・協力して学習を作ることができるようになるが、そこでは荒削りの部分がとらえられて学習指導され続け、その結果として子ども達は動き続け学習し続ける存在となる。

## (2) 学習指導の即時性

この学習指導法において最も重要なのは、その日その時の即時性である。即時性とは、①その時々で子ども達の学習の動きを感じ取ること、②感じ取ったものを糸口にしてその場で状況を作ること、③作った状況にその場で子ども達を追い込んで十分に考えさせ子ども達自らが学習の仕方をその場で分かるようにすること、を要件とする。なぜ、このような即時性が求められるかといえば、第一に、その時々で子ども達から感じ取られたことは、子ども達のぎりぎりの関係性において教室に立ち現れたものであり、第二に、子ども達はその時に作った学習はその時の関係性において作られたものであるから、その時に生じている問題こそが、学習における最大の問題だからである。

## (3) カリキュラム・マネジメントと「朝の会」

以上述べた即時性は、カリキュラム・マネジメントの方法論の重要な要素である。薄田先生は、2年月組の子ども達の一人ひとりの学習能力が高まり、同時に、助け合い・協力して学習を作ることができるようにしようと考えている。これは、カリキュラム・マネジメントの目標である。そのために、教科指導(奈良女附小のしごと・けいこ)や特別活動(奈良女附小のなかよし)を経営(マネジメント)していくのである。この二つの目標の達成においては、1年間の詳細な指導計画をそのまま実行することは有効ではない。子ども達の状況を知り、それに合わせて、教科や特活での、指導の仕方や学習するものを変更したり工夫したりしなければならないのである。

カリキュラム・マネジメントは、子ども達一人ひとりの学習する力を伸ばし、同時に学級全体で学習を作る力を最大限にすることを目的としているが、一人ひとりの力の伸びは、学級全体で学習を作る際に発揮される最大の力につながっている。したがって教師は、つねに子ども達の持つ最大の力の発揮に向けて働きかけなければならない。それが、その時のつながりに目を向け、そのつながりの問題点を糸口とした即時性をもった学習指導である。

薄田先生の「朝の会」における指導は、4月・5月は6月の学習研究会での具体的な姿を見通し、6月の研究会当日はその日の具体像を見通している。つまり、学習を作るということについて、子ども達がしていることを「朝の会」において発見し、そのことと教師の見通しとのギャップ感じ取って、それを子ども達に足りない具体的なものに下ろして学習指導しているのである。

問題は、数か月先の子ども達の学習とその日に子ども達によって作られる学習を具体的にイメージし、そのイメージと「朝の会」における子ども達の学習の作り方のギャップを感じた際に、そのギャップを生み出しているものが今目の前で子ども達が作っている学習の具体的に何であるのかを瞬時につかんで、指導の状況をその場で作り出し、子ども達をそこに追い込んで行くことである。カリキュラム・マネジメントはこのような即時性を持った、子ども達の学習を良くしようとする教師の意志と実行力が必要なのである。

## (4) 学習指導：子ども達を伸びていく存在にする

ここで言う学習指導とは、学習の内容ではなく、学習の仕方についての指導である。したがって本論文で見たように、子ども達がいま作っている学習を教師が位置づけ、その問題点について考える時間を十分にとって、自分達の学習の作り方において何が足りないのか、何が問題なのかについて子ども達に考えさせ、それを見つけさせる方法をとる。

子ども達は、現在自分達の持てるものを使い、ぎりぎりのところでバランスしながら協力して学習を作っている。けれども、自分達のもてるものをつぎ込んだ学習を作っても、必ずどこかに荒削りの部分がある。教師は、その荒削りの部分をとらえ、その場で取り上げ位置づけて学習指導を行うのである。

奈良女附小の「しごと」学習が、子ども達の全身全霊を打ち込む学習であるのは、もしそうでなけれ

ば、子ども達が作る学習の荒削りの部分が表に現れず、学習指導ができないためでもある。そして、そのような学習と学習指導の在り方は「朝の会」でも同様なのである。こうして学習では、荒削りの部分がつねに現れるから、子ども達をして、むしろ今の型を破り、新しい型を作っていく、新たな学習の創造に向けてつねに前進し伸び続ける存在にするもの、それが「朝の会」なのである。

## 謝辞

2019年度4月より、「朝の会」から数時間を連続して参観させていただきご指導を賜った、奈良女子大学附属小学校・副校長・杉澤学先生、2年月組の薄田太一先生、そしてカメラマンではなく溜池という名前を覚えて下さった子ども達と、職員室でのお話の仲間に加えて下さった教職員の皆様に感謝申し上げます。

## 注

- (1) 林茂樹「反省会がなぜ責任追及の場になるのか：学級集団内の相互行為という視覚から」（摂南大学教育学研究、no.12、2016）、辻博美他「小学3年生の「朝の会」における発話の継承：学級文化の協同的構成（2）」日本教育心理学会総会発表論文集、no.44、2002）、浅川陽子「小学校における文化と自治を育む特別活動（教科外教育活動）：学級活動「朝の会」・帰りの会」の実践と考察」（『日本教育心理学会総会発表論文集』no.44、2002）。
- (2) 長岡文雄「学級づくり（三）：朝の会や帰りの会を生かすには」（『学習研究』no.129、1958-04）、堀本三和子「生活と学習をつなぐ『朝の会』で育つ『なかよし』」（『学習研究』no.446、2010-08）。
- (3) 杉澤学「『なかよし』と深い学びの関係」（『学習研究』no.489、2019-01）、薄田太一「子どもの主体的な学びを育てる朝の会」（『考える子ども』no.391、2019-03）。
- (4) 杉澤学「大和高原の凍り豆腐はなぜ衰退したのか①（四年生・しごと）」（『学習研究』no.490、2019-04）。
- (5) 拙稿「授業とは何をいうか 奈良の学習法における構造的把握後：真理体としての実践」（『宇都宮大学教育学部実践紀要』no.5、2018-08）、「授

業とは何をいうか：奈良の学習法における『しごと』と学習交流」（同、no.2、2016-08）、「道徳的实践性と授業：奈良女子大学附属小学校・1年月組の四月から十二月までを追って」（『考える子ども』no.370、2016-03）。

令和2年4月1日 受理





The Method of Study Guidance in the "Asa-no-kai"  
(Morning Meeting) of Elementary School  
—Through the One-year Analysis on the "Asa-no-kai"  
(Morning Meeting) of "2-nen-Tuki-gumi" (second grade  
class) of the Nara Woman's University Attached  
Elementary School—

Yoshihiro TAMEIKE